

自己評価報告書

平成 23 年 5 月 10 日現在

機関番号：33912

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008 ～ 2011

課題番号：20520533

研究課題名 (和文) 社会・認知的視点から見た外国語としての英語ライティング力と動機付けの長期的発達

研究課題名 (英文) Changes in Japanese students' English writing ability and motivation to write in English: A longitudinal study from a sociocultural perspective

研究代表者 佐々木 みゆき (MIYUKI SASAKI)

名古屋学院大学・外国語学部・教授

研究者番号：60241147

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：第二言語習得理論

1. 研究計画の概要

本研究は、日本人大学生の英語ライティング力とライティングへの動機付けが、3年半の長期にわたってどのように変化・発達していくかを、留学の効果に焦点をあてて、量的データと質的データの両面から追跡調査することを目的としている。本研究では、従来応用言語学の世界で行われてきた認知的(cognitive)視点に加え、近年重要な視点として注目されている社会文化的(sociocultural)視点を取り入れ、第2言語のライティング力という認知能力の発達に、英語圏への留学も含めた外部環境要因が長期的にどのように影響するかを調査し、新たな知見を得る事をめざしている。

2. 研究の進捗状況

第3年度の平成22年3月末までに、合計17名の参加者から、毎年以下のようにデータ採取を行った。

(1)研究参加者17名(進路変更のため、平成22年度に1名離脱)に個別に設備のある研究室に来て英語説明文を書いてもらい、書き終わった直後に書いている時の様子を録画したビデオテープを見ながら、書いている最中に何を考えていたかを逐次話してもらい、オーディオテープレコーダーに録音した。(2)採取したデータは、直後に転記した。(3)基礎データとして、標準英語力測定テストを用いて、一般的な英語力を測定した。(4)「母語作文力」測定のため、(1)で書いてもらった英作文と似た課題と長さで、被験者に日本語作文を書いてもらい、国語作文の専門家2名に評価してもらった。(5)これら量的データとは別に、ケーススタディの手法を使って被験者に個別にインタビューを行い、英語を書くことに関する現在までの学習経験や、英語一般や英作文

に対する自信や動機付けなどについて調査した。(6)留学した学生6名のうち3名に対しては、メールを使ったアンケートと聞き取り調査も行った。(7)以上で採取したデータを暫定的に分析した結果を取り入れたり、以前の先行研究の結果と比較することにより、以下の「5、代表的な研究成果」の項目に記したように、現在までに国際雑誌に論文3本を出版し(①-③)、台湾の国際学会での基調講演(④)の講演者や、スペインで国際学会の招待討論会のパネラーとして、本研究の成果を発表(⑤)している。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

平成22年度に、進路変更のため参加者のひとりが研究から離脱した他は、当初予定していたデータを順調に収集し、採点・転機などの処理を行っている

4. 今後の研究の推進方策

当初の予定通り、以下のようにデータ採取を進め、最終分析を行う予定である。

(1)被験者4年次のデータ採取

4年時7月に、平成22年度と同じように英作文を書いてもらい、英作文力や英語を書く際の方略の量的データを採取する。又、英語一般や英作文に対する自信や動機付けについての聞き取りインタビューも合わせて行う。

(2)短期留学前後でのデータ採取

被験者のうち、4年生の夏休みや春休みに短期の留学に行く学生がいれば、その前後にも、英語一般や英作文に対する自信や動機付けについての聞き取りインタビューを行う。同意する被験者がいれば、留学中に「英語を書くこと」に対して感じた事、考えた事を記した日記を書い

てもらい、“insider view”データとして提出してもらう。

(3) 3年半のプロフィール作成(平成23年8月～10月)

被験者からの全てのデータ採取が(2)で終了するので、1年生の時から複数回にわたって採取したデータを整理して、被験者それぞれの量的データの変化のプロフィールを作る。書く際に用いた方略のデータを量化するため、得られたプロトコールを様々な方略にコーディングする。ひとりひとりのプロフィールには、被験者の一般英語力、英作文力、書く速度と量、書く際に用いる方略などの変数の3年半にわたる変化を図や表を使って見やすく詳細に記入する。

(4) 4年生になった被験者へのインタビュー(平成23年11月12月)

大学での教育を終えようとしている被験者ひとりひとりに(3)で作成したプロフィールを見せ、それぞれの変数について、「3年半で変化したと思うか、又それはなぜか」と、まず問い、その後、実際の変化の様子を見せて、「なぜこのように変化したと思うか」についてインタビューする。さらに、社会・文化的背景を含めた変化の背景を、被験者自身の言葉で語ってもらう。

(5) 1年間に採取したデータのまとめと分析(平成24年1月～3月)

平成20年～23年度に採取した4年分の量的データをコンピュータに入力し、全体の傾向などを分析する。又、インタビューによって得られた、被験者自身の言葉による「3年半のライティング行動の変化の原因や社会文化的背景」をExpanded Activity Theoryを使って分析し、一般化できる傾向を探る。量的データによる統計的検証の結果と、インタビューや日記データに現れた社会文化的環境の影響が被験者のライティング力の変化にどのように関わっているかを考察し、日本人英語学習者を対象にした効率的かつ最適化された英作文指導法を考察する。研究成果を全米応用言語学会(American Association of Applied Linguistics)の年次総会などの国際学会で発表すると共に、論文を完成させる。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① Sasaki, M. Effects of varying lengths of study-abroad experiences on Japanese EFL students' L2 writing ability and motivation: A longitudinal study. TESOL Quarterly, 45, .81 - 105. 2011年, 査読有

② Sasaki, M. Changes in EFL students' writing over 3.5 years: A socio-cognitive account. In R. M. Manchón (Ed.). Learning, teaching, and researching writing in

foreign language contexts (pp. 49-76). Clevedon, England: Multilingual Matters. 2009年、査読有

③ Sasaki, M. The 150-year history of English language assessment in Japanese education. Language Testing, 25 (1), 63-83..2008年、査読有

[学会発表] (計2件)

① Sasaki, M. (2010, May). What contributions can study of Japanese EFL learners make to the field of L2 writing? Presented for *Language Learning Round Table* organized by Professor Ilona Leki of the University of Tennessee, “Cross-Pollinations in L2 Writing Research across Continents” held at the Symposium on Second Language Writing at the University of Murcia, May 2010).

② Sasaki, M. (2009, May). (Plenary Speaker). *Changes in Japanese students' English writing ability, strategy-use, and motivation during their 3.5 year university life.* The 26th Conference of English Teaching and Learning in the Republic of China. National Tsing Hua University, Taiwan.